〔大学院ＧＰ〕採択

遺伝カウンセリングにおける「情報提供」に関する臨床心理学的研究

Research of clinical psychology on “provision of information” in genetic counseling

研究代表者　福田　斎（D3）　　教員　伊藤　良子

研究分担者　井上　嘉孝（D3）　築山　裕子（D3）　西田　麻衣子（D2）

松本　拓磨（D1）　佐々木　麻子（D1）　小林　晃子（M2）

高瀬　泉（M2）

〔研究目的〕

遺伝カウンセリングの中核を成すのは、クライエントに対する情報提供であるといわれる。医療者から提供された情報に基づいて、クライエントは発症前遺伝子検査を受けるかどうか、あるいは人工妊娠中絶を行うか否か、などといった自らの人生における重要な意思決定を行うこととなる。

従来、情報提供についてはその内容面が重視されてきた。たとえばカンファレンスなどにおいても、遺伝カウンセリングにおいてクライエントに伝えられた情報の内容が医学的に正確で妥当なものであったのか、ということが中心的に検討される。しかし、クライエントが人生における重要な意思決定を行う際には、伝えられた情報の「内容」ばかりでなく、その情報をクライエントの「心」がどのように受け取ったのか、ということが極めて大きく作用する。また、遺伝カウンセリングにおける「情報提供」を考えていくにあたって、情報を受け取るというクライエントの体験のみならず、情報を提供する医療者の側の体験についても理解しようとする視点は不可欠であると考えられる。

従って、本研究では、遺伝カウンセリングにおけるクライエントへの情報提供における、情報を受け取るクライエントと情報を提供する医療者双方の体験について心理臨床の観点から検討することを目的とした。また、その過程で、遺伝カウンセリングにのみ留まるのではなく、近年ますます明らかになっていく遺伝という現象を、医療者、クライエントの枠をこえ、我々人類の心がどのように受け止めており、あるいはどのように受け止め得るのかということについても模索した。

〔研究経過〕

今年度の主な活動としては、まず、前年度行った調査をまとめ第32回日本遺伝カウンセリング学会学術集会において学会発表を行ったことが挙げられる。さらに、法医学の現場における「遺伝カウンセリング」の実態についての講演会、京都大学医学部附属病院遺伝診療部への来談者で心理臨床面接を継続された事例についての事例検討会、「医療における心理臨床ワークショップ」での情報収集を行った。ここでは、いわゆる遺伝カウンセリングの場をこえた「遺伝カウンセリング」、また、治すという次元をこえたかかわりが求められる医療現場の実情を知ると同時に、心理臨床の立場から我々が何をなし得るのかということを考える機会を得ることができた。さらに、進化生物学の第一人者として長年研究を行ってこられた太田朋子先生をお招きしてシンポジウムを開催し、遺伝カウンセリングで通常取り扱われる範囲に留まらない「遺伝」という現象そのもの、生命観についても学ぶ機会を得た。

〔研究成果〕

前年度行った調査結果を分析した結果、難治性・進行性の遺伝性疾患であることの告知において、自らの置かれた状況に関して強い不安を感じることと自らの疾患に対して主体的に向き合うことが密接に結びついていること、また、不安を感じ表現するということが不十分な場合に性急な行動化が起こる可能性があることが見いだされた。この結果は「遺伝にまつわる情報を受け取る際の体験に関する仮想設定を用いた研究」として、第32回日本遺伝カウンセリング学会学術集会で発表された。

また、法医学の現場における「遺伝カウンセリング」の実態についての講演会では、法医学の現場においても、家族の死と向き合わざるを得なくなった遺族に対し遺伝カウンセリングと呼ぶべき営みが要求されることがあることとその難しさが明らかにされた。京都大学医学部附属病院遺伝診療部への来談者で心理臨床面接を継続された事例についての事例検討会からは、遺伝カウンセリングの営みは（客観的な）情報が（主観的な）意思と密接に関係するプロセスであること、また、クライエントの発するWhyに対し、安易にHowに置き換えて答えるのではなく、非常に困難で危険を伴うことではあるが、視野を拡大し背後にある情動的なものにも目を向けることによって異なった次元での How の問題として考える必要性が明らかとなった。そして、医療における心理臨床ワークショップでは、治すという次元をこえたかかわりが要求される医療現場においては、安定した関わりの中でクライエントの想いを聴き、自分の率直な想いをのびのびと語れるような時間を提供し、先が見えない不安やどうしようもない思いをそっと支えながら、その人らしく過ごすことができるように手助けしていくことの重要性が確認された。

さらに、進化生物学者である太田朋子先生をお招きしてのシンポジウムと意見交換からは、生命というものに真摯に向き合い、曖昧さ、複雑さを含み込んだ形で構築された先生御自身の、シンプルで明瞭な近代の「科学」とは一線を画した「科学の知」に触れるという貴重な機会を得ることができた。